

研究発表会実施概要

1 日 時 平成19年4月18日(水) 15時～

2 場 所 関西大学100周年記念会館 第2会議室

3 内 容

(1) 研究発表(15:00～15:40)

・本西泰三 経済学部教授

発表テーマ「アジアにおける為替レートの『ずれ』を測る」

・長岡康夫 化学生命工学部准教授

発表テーマ「イチョウ葉に含まれる育毛活性成分」

(2) 質疑応答(15:40～16:00)

4 大学側出席者

河田悌一学長、大津留智恵子学長補佐 他

5 参考資料

(1) 関西大学プレスリリース KU EXPRESS (No.7)

「関西大学博物館所蔵の「鉢形土器」で新事実を発見」

(2) 大阪市が設置をめざす新商業高等学校に関わる大阪市教育委員会と関西大学との連携協定書

(3) 登録有形文化財指定記念展示「簡文館ものがたり」チラシ

(4) 関西大学公開講座(高槻市)前期講座『「食」をひもとく』チラシ

(5) 平成19年度教育後援会総会～父母の1日大学～案内

(6) 2007 学校インターンシッププログラム

(7) 2005 年度文部科学省 特色ある大学教育支援プログラム

「人間性とキャリア形成を促す学校 Internship」2006 年度報告書

(8) 関西大学インターンシッププログラム 2007

(9) 平成18年度インターンシップ(ビジネス)報告書

以 上

アジアにおける為替レートの「ずれ」を測る

経済学部教授 本西泰三

【概要】

為替レートの「ずれ」(misalignment)は長い間、経済学者のみならず、政策担当者、民間投資家の重大な関心事であった。そして近年、アジア各国の為替レートにとりわけ注目が集まっている。本研究は、アジア各国の為替レートのずれの大きさを測定し、その原因を明らかにすることを目的としている。

なぜ為替レートのずれがそれほど大きな関心を集めてきたのであろうか。為替レートの変動は輸出入の変化を通じて、各国の経済に大きな影響をもたらすことが、その最大の要因である。また為替レートはしばしば理論的に説明することが難しいと思われるほど大きく変動し、これに経済学者は頭を悩ませ、政策担当者は振り回され、民間投資家は一喜一憂してきた。

中国のように、固定レート制に近い為替制度を採用している国は、為替レートのずれにとりわけ敏感である。このずれが大きい場合には、投機的資金の動きのために、固定レート制の維持が困難になる恐れがあるからである。また、アジアの国々が現在よりも更に緊密な金融協力を追求するべきだと考える人々にとっては、適切な水準の為替レートを維持することが重要な意味を持つ。

本研究の分析によると、韓国ウォンは2004年時点で、ほぼずれがないのに対し、中国元は38%程度過小評価されている。最近のウォン高を考慮すると、現在韓国ウォンは過大評価されている可能性が高い。中国元は政府の為替管理政策の下で緩やかに増価し続けているが、ずれを解消するにはさらに大幅な増価が必要である。

【プロフィール】

1969年兵庫県生まれ。東京大学経済学部、大学院卒業(経済学博士)。1999年より5年間、長崎大学経済学部で国際マクロ経済学を担当。この間アジア開発銀行(マニラ)リサーチフェロー、財務総合政策研究所特別研究員を勤める。2004年より関西大学経済学部で経済政策を担当。この間北京大学政策管理学院客員副教授・韓国対外経済政策研究院客員研究員を勤める。これまでマクロ・国際経済政策の研究を中心に、金融政策・為替レート・直接投資・所得分配等に関連した論文を著している。専門領域は比較的広く、経済政策全般の、特に現実的な側面に強い関心を持っている。最近は経済学教育にも興味を深めている。

イチョウ葉に含まれる育毛活性成分

化学生命工学部准教授 長岡康夫

【概要】

イチョウの葉は中国で古くから喘息や気管支炎の治療用生薬として用いられてきた。1960年代にドイツやフランスでイチョウ葉エキス製剤が脳機能不全の治療薬として承認されてから、本エキスの認知症やアルツハイマー病の改善薬としての可能性が検証されている。現在、日本ではイチョウ葉エキスは健康食品として、大手の医薬品・食品メーカーなどからも販売されている。

イチョウ葉の中には様々なフラボノイド類が含まれている。その中にフラボン 2 分子が化学結合して 2 量体になったビフラボン類と呼ばれる化合物群が存在する。最近、私はこのビフラボン類に育毛活性があることを見出した。ビフラボン類を数種類含むエキスを剃毛したマウスの背中に塗ると優位にその部位の発毛が促進された。また、ヒトの毛髪関連細胞の培養にビフラボン類の溶液を添加すると、その細胞の増殖が増進することがわかった。ビフラボンにも数種類あり、その中でもシアドピチシンと呼ばれるビフラボンに最も強い細胞増殖活性が認められ、この物質を細胞に添加すると増殖を司る細胞内タンパク質が活性化されることが明らかになった。

シアドピチシンは秋篠宮悠人親王の御印である高野槇の葉に最も多く含まれる成分でもある。現在はイチョウ葉だけではなく高野槇からもビフラボンの抽出を行い、それらの育毛活性を試験している。

【プロフィール】

1965 年 神奈川県生まれ。関西大学化学生命工学部准教授。博士（薬学）、薬剤師、健康食品管理士。専門は医薬品工学。京都大学薬学研究科博士前期課程修了後、京都大学薬学研究科助手を経て 2001 年から現職。その間 2005 年 4 月から 1 年間、オックスフォード大学医科学分野生理学部で在学研究。医薬品開発を志向した生体機能分子の探索と生理機能メカニズムの解明を目的に研究を進めている。